
野球バカ

リリィ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

野球バカ

【Nコード】

N5194A

【作者名】

リリイ

【あらすじ】

野球が大好きになった早川和也。高校に入ってから、野球部に入り、ピッチャーをすることになるのだが、球が遅い！球を速くしたい！そんな悩みを抱える彼は、お父さんに相談することに…野球好きの作者が送る、青春ラブコメ?!今、ここに誕生!!!!

プロローグ（前書き）

えっと……完全なノリです！

全然ラブラブしないかもしれませんし、コメコメ（？）しないかもしれない！

全て勢いで書いてしまおうと思っています！

どうか最後まで読んでいただけたら幸いです。

プロローグ

「もっと速い球が投げたい！」

一人の少年は叫んだ。世界中のほとんどの野球少年が思っていることだろう。でも彼は少し違った。

「俺、絶対プロになりたいんだ！ドラフト1位で指名されて！んでもって日本制覇して、メジャーに行くんだ！」

誰でも一度は持ってしまう無謀な夢である。そんな無謀な夢を父親に熱く！そして力強く少年は言った。

「でけえ夢だな！目標を持つことはいいことだぞ！でもなあ…」
そう、

「でも…」

である。きっと誰もがそう言うだろう。彼の父親も

「でも…」

と言ってしまった。そんな無謀な挑戦者の名前は早川和也…ここまではない。でも…早川少年は高校2年生である…こんな無謀な夢をみるのは、一般的に小学生～中学生までだろう。

だが、例外もある。幼い頃から野球が好きで、センスもあり、やる気もあり、プロになる為に毎日練習してるような努力家なら、まだ

「頑張ってる！」

とか

「お前ならなれるって！」

とか言っただけだろう。でも…彼はズバ抜けて問題外！高校から野球を始め、

「俺ピッチャーしたいんだ！甲子園いきたいんだ！だからピッチャーやらせて！」

などと言いながら野球部に飛込んできた大馬鹿者である！そんな早川少年を野球部の監督とチームメイトは迎え入れた。何故そんな無謀な挑戦者を迎え入れたかというと、

「ちようどピッチャーがいなかったんだよ！ナイスタイミング！」

と監督：

「人数が少なかったから大歓迎だ！」

とチームメイトが歓迎した：本当にいいのだろうか：？

そして1年とちよつと過ぎた今、早川少年は高校2年生の後半、もう3年生になろうとしていた。そして重大な悩みを抱えている。

「球を速くするにはどうすればいい！？」

そう、速球を上げたい！という悩み：彼の体はかなり鍛えられているにも関わらず、速球がMAX110km/hなのだ！それは不満もあるだろう。

その悩みを聞いているのは父親の早川和幸で、高校時代にピッチャーとして甲子園のマウンドに上がったこともあるくらいすごい父親である。

「：お前の球は軽い。しかも、球にちゃんと体重を乗せきれてないんだ。だから遅いんだよ。まあ：腕力だけで110でるのはすごいと思うけどなあ！流石！俺の息子！！」

「体重？体重を球に乗せるにはどうすれば？いったいどうすればいいんでしょうか！？父上！！！」

「よし！俺に着いてこい！！！」

立ち上がり何処かへ向かう我等が父上和幸：家の庭に出て和也にグローブを渡す和幸。

「これからキャッチボールするぞ！」

キャッチボールを要求する和幸

「はあ？何でー！？俺は球が速くなりたいの！キャッチボールを親父としたいんじゃないの！わかる？」

そしてキャッチボールを断る和也

「ん？お前球速くしたいんじゃないの？」

「したいに決まってるだろ！！！」

「じゃあキャッチボールだろ？」

「だから何でそうなるんだよ！？」

「何でって…肩暖めないと投げにくいだろ？」

「そうなんだ〜！すげえ！俺そんなの知らなかったよ！流石俺の親父！」

「…馬鹿か？お前はピッチャーやってんだろ？肩慣らさずに全力で投げんのか？お前は？」

「おう！当たり前だろ？速く投げないと打たれちゃうじゃん！俺」

「…お前…肩壊したいのか？」

「え？そんなわけないだろ！馬鹿だなあ！なに言ってるんだ親父！」

「…肩…痛くないか？」

「あ？ああ…あんまり痛くはないけど」

「…ならいいんだ」

「それより早くキャッチボールしようや！俺、早く投げたくてウズウズしてんだ！！」

「ああ…悪い！じゃあやるか！」

そしてキャッチボールが始まった。最初の方は基本的な体重移動から、キャッチボールのやり方、ボールの基本の握り方までみっちり教えられた。

そして……

「うおらああ！！！！」

ビュッ！シュルルルル……ズバーン！

「おお！いいねいいね！キてるよ！今の球はキてるよ！流石俺の息子だ！」

「へん！ったりめえだろ〜！俺センスあるもん！天才だよ！天才！！」

「調子乗るな！…まあ、体重移動を練習して、球に体重を乗せたただけでこれほど速くなるとは思わなかったよ！若干コントロールに問題ありだな！」

「う…うつせえ！これから良くすんだよ！見てろ！十中八九狙ったところにいくようにしてやっかな！」

「はいはい。分かりました。…さてと……」

「お、おい！どこ行くんだよ？もうちょっと教えてくれよ！」
グローブを着けたまま家の中へ向かう和幸。

「お前、今自分の投げる球が何キロでっか知りてえだろ？」

「おう！」

「分かった。ちょっと待ってろ！」

そのまま家の中へ入って行った和幸。

5分後出てきたときに右手に持っていたのは

「親父…それ、もしかして…」

「ん？スピードガン。昔俺が買ったやつ。」

…持っていたのはスピードガンだった！

「早速だが…一回だけ、自分の最高の球を投げてみる。測ってやる！」

「うおお！すっげー！マジで感動！目標はとりあえず130で…いくぞ？」

「いつでもどうぞ。」

「うおおおおおお！！いっけえええええ！！！！」

ビュッ！！ギョルル！シュオオオー！！…ズバーン！！！！

「どうだった？どうだった！？」

「…：今のが全力か？」

「あたりめえだろ！おい！何キロ！？何キロ！？」

「…：146…故障じゃないよな？」

なんと146km/h！！！体重移動をして体重を乗せただけでこれほど速くなるのだろうか！？

「驚いたな…でも見たところ力んでるし、腕のしなりが弱い。体重移動も、もうちょっと上手くてきるだろ？こりやもっと速くなるわ…」

「マジで！？夏までに間に合うかな？打たれないかな？」

「いや、打たれないかは分からん…もっとキレを磨いて、コントロールを上げればあるいは…」

「うは！俺やべえ！俺やべえ！俺もっと投げ込むわ！見とれよ親父

「次の目標は、150だからな!!」

「分かった分かった：ちゃんとキレも磨けよう！」

「え？どうやって？」

「自分で調べろ！」

「ケチッ！」

「はいはいケチで結構」

その日、和也はずっと投げ続けていた……

プロローグ（後書き）

最後まで読んで下さってありがとうございます！
できれば完結まで、すえながくお付き合いしていただけたら嬉しい
です。

第1話：本を買いに行こう！（前書き）

頑張ってコメコメしました（笑）

第1話：本を買いに行こう！

ピピピピッ！…ピピピピッ！…ピピピピッ！…カチッ……

「……ふおあゝ…朝…か？……」

カーテンを開けると、溢れんばかりの太陽光が降り注ぐ。今日は晴れだ！んでもって、日曜日！残念ながら今日は部活が無い。

…テンテンテンテンテンテンテン…♪テンテンテンテンテンテン
テテンテン…♪

突然ケータイが鳴る…この曲は…階段をブリッジして降りてくるホラーの…てことは…あいつかあ！

「…はいゝもすもす？」

『ぶっ…朝からなに言ってるの？』

電話から聞こえる女声…電話の先の声の主は…

「何用？」

『何用とはなによ？何用とは？この香織ちゃんが和也に電話したただけでしょ？…もしかして寝起き？』

そう、香織。吉岡香織。小学生のときに引っ越してきて、親どうしが意気投合！昔はよく遊んだもんだ…高校入ってから、俺が部活を始めたから、登校するときぐらいしか会わなかった。

「…ああ…昨日投げ込んでて疲れてたから…でもまだ8時だぞ？」

『いいじゃない！時間なんて…！それより今日私本買いに行くんだけど…』

「嫌だ。」

『ま…まだ何にも言ってないゝ！話くらい最後まで聞いてよ！』

「付いてこいってだろ？めんどくさい。」

『なっ…まだそこまで言ってないでしょ！？ちゃんと聞いてよお！』

「…じゃあ何？」

『今日本買いに行くんだけど、和也も…あの…野球の本とか買いに行く用ないかなゝって…変化球とかの本をさ！たしかピッチャーだ

ったよね?」

「ん? ああ: 確かにピッチャーですが、何? 買ってきてくれるの?」

『もう! 行くの! 本買いに! 和也は私と本買いに行くの!』

「: 分かったよ! ! 行きますよ! 行かせてください!」

『分かればよろしい! じゃあ10時に駅でね!』

「何処の駅?」

『西町の! 東出入口のところで!』

西町駅なのに東出入口ってどうよ? 西側でいいじゃん!

「あいあい。分かったよ。切るぞ?」

『うん! ばいばい! !』

ピッ:

ああ: めんどくさいことになった: 別に断ってもよかったけど、断ると香織のやつ、泣くからな: まあ野球の本でも買ってキレを磨く方法でも調べるか! : 確か待ち合わせは10時: そして今は: 8時37分。駅まで歩いて20~30分だからあと1時間くらい残っている。

「: : : : とりあえず: 歯: 磨こ:」

適当に服をはおると、部屋を出た。今日は2月12日。まさに冬真っ最中! そして当然のごとく寒い。部屋を出た俺は冬の寒さに凍えながらも洗面所へと向かった。

「あ! もう和くん起きたの! なあに? どうか行くの? 寒いわよ? 今日寒いわよ?」

突然目の前に現れた女性: この人は:

「野球の本買いに行くんだよ!」

「あらら? 一人? ママも着いてっていい? 今日暇なのよ!」

この人は早川和美。俺の母さん。なんと俺を産んだのが、17歳だそう! それを聞いたときは、正直マジでびっくりした。高校の息子がいるのに、34歳という若さだ。でも、歳よりも全然若く見える。当然のごとく他の保護者に比べて若い。: : : でも: : : なんか嫌だ。 「: : : いや: : : 香織が来るから一人じゃないな: : :」

「じゃあママも着いていく！和くんが香織ちゃんになにされるか分からないから！」

「なんにもないって！それより今日は休んだら？」

「ママを心配してくれるの？優しい！でも心配ご無用！ママ若いから！まだまだ元気よ！だから心配することないない！」

「ないない！じゃない！親父のところにでも行ってこいって！」

「ああ……和くん……ママをいじめるのね？ああ……ママ……ママ……甘えてきてくれてた和くんがもうこんなに大きくなって……ママはもう……うっ……うっ……」

「泣き真似禁止！それより早く歯磨きさせてくれよ！」

「てへっ！ばれちゃった？ああ……ママの泣き真似大作戦 in 洗面所パート6があ……」

「………パート6って……いったいいくつあるの？それ……」

「ひ・み・ちゅ……！」

ああ……ウザい……なんでこんなにウザいんだろう？

とりあえず無視という方向で、歯を磨こう！

ジャー……シャコシャコシャコ……じー……シャコシャコシャコシヤコ……じー………

「………ねえ……なんでまだいんの？しかも見すぎ！凝視すんな！」

「てへっ！」

「てへっ！じゃない！親父のところにでも行ってこいって！気になつて磨けない……！」

「おやおや和くん……つたら……！照れちゃって………もしかしてママにほの字ですか？……でも親子よ！そんなことは……でも和くんのためなら……！」

「あー……！もういいから早くどっか行け……！」

「はい……！ママはパパのところに行って参りますです……！」

今度こそと思い歯磨きを続けた。そして歯磨きが終わり、顔を洗い終えて、朝御飯でも思っている……

「はあ……！ママ特製スペシャルオムレツかんせ……！さあ和くん

！ママの愛を食べて！そして胃袋を満たして！」

そう叫びながら、エプロン姿の母さんが現れた：親父のところに行
ったんじゃないのかよ：

「食べるから向こうにおいといてよ：」

「はいはーい！おかわりほしくなったらいつて！ママがすぐに作る
から！卵はあと5個しかないけど：ママの愛は尽きないからねー！
！」

「いや：おかわりって：無理でしょ？このサイズ全部食べるの無理
でしょ？何個使ったの卵！？」

そこには通常のオムレツの5倍はあるオムレツがあった：しかもそ
の焼き卵の固まりを持って屈託のない笑顔を浮かべる母さん：なん
だこれ？意味が分からん

「悪いけど、たぶん俺、残すよ？」

「いいの！ママの愛を受け止めてくれたらいいの！残りなんてパ
パや和菜ちゃんが食べてくれるから！」

：ああ：むちゃくちゃだ！絶対何十個も使ってる！

「：とりあえず食べるから置いてよ。」

タタタタッ！

「あ！お兄ちゃんとママおっはよう！！！」

俺と母さんに元気に挨拶をしてきた少女：名前は和菜。まあ聞いて
のとおり俺がお兄ちゃんということは、和菜は俺の妹である。

「はーい！和菜ちゃんおっはよう！おっはーよ！おっはー！さあみ
んなで一緒に！おっ：」

「古い！」

「うわーん！和菜ちゃんまでママをいじめるのねー！もう怒った！
マヨネーズ飲んでやる！マヨチュツチュよ！えいっ！えいっ！」

「：どうしようお兄ちゃん：ママが壊れた！」

「：……大丈夫。そのうち治るから：」

「ほうほう！ひにひなふてもいいほ！（そうそう！気にしなくても
いいの！）」

マヨネーズを吸いながらしゃべりだした母さん…もう、口からどばどばマヨネーズが流れ出てくる…かなり汚い…

「わー！ママ汚い！拭いて！早く拭いて！」

「ぶっぶっぶっ！！！」

いきなりマヨネーズを吹き出す母さん…ちょっとショック…

「ちよっ！汚い！ママ汚い！ちよ…すごいことなってる！私すごいことなってるってー！！！」

吹き出したマヨネーズは全て和菜に直撃！ご愁傷さまです。

「だって和菜ちゃんが、吹けていうから吹いたのにいっ！」

「違う！私は拭いてっていったの！」

「ほら！吹いてっていったじゃない！」

「……もういいわ…ママ…もう吹かないでね？」

「はぁ…いい！もう吹きませ〜ん！誓いまぁ〜す！ママ、神様に誓いまぁ〜す！」

二人が、そんな馬鹿なことをしている間に特製オムレツの5分の1を食べ終えた俺は、やっと気付いた…

「え！？もう9時50分ツスか？時間たつの早くね？えらい早くね？やべえ！早く行かないと！」

気付けば9時50分！確実に間に合わない！しかもまだ着替えてすらない！とりあえず急いで部屋に行き、着替をする。

「だぁ…間に合わね…どうしよう？このままドタキャン？いや、それは可哀想だ…どうすれば？」

「へっへっへ！和くん！こういうときこそママにまっかせなさい！なんだその笑いかたは！？しかもまだマヨネーズだらけのまま自信満々で言っている母さん…まるで説得力がない！」

「…何か方法でもあんの？」

「ある！あるわよ！ママのスーパードラテクで駅まで送っちゃうわよ〜！」

確に車で行くのはいい考えたと思う。

…でも母さん免許もってたっけ？

「それはいいけど：母さん免許持ってるの？」

「バリバリ持ってます！最近採ったのよ！すごい？ママすごい？」

最近採ったか：ますます不安になってきた：でもそれしか方法は無い！俺は遅刻は嫌いだ！

「頼むよ母さん！西町駅まで送ってくれ！」

「オッケーよ！さあ早く車へ！ママの愛車へ！」

「わ、わかった！」

ガチャ：ボタン！ブルン！ブルン！ブブブブ：

「よし！西町駅へしゅっぱーっ！」

ガガガガ！：

「あの：母さん？壁に擦ってますけど！当たってますけど！」

「まって和くん！話しかけないで！免許採ってから人乗せるの初めてなの！ママ集中しないと！運転に集中しないと！」

：そうですか：人乗せるの初めてですか：スーパードラテクは何処へいったの？誰か教えてー！！

「そうよ！クラッチ踏んでギアチェンジよ！ママったら馬鹿ね！」

「ちょ：母さん！これATだね！そんなにギアチェンジしないよね？！まずクラッチ無いでしょ？ブレーキとアクセルしかないでしょ？ブレーキ踏みながらかえて、それ以降は全然かえなくていいよね！？」

そこにはカチャカチャといろんなものを動かし回る母さんがいた：ああ：俺今日で死ぬのかな？

酷いよ神様！やっとう球が速くなってきたってのに！！

「もうわかんない！和くん教えてー！」

はあ？免許を持っている人が免許を持っていない息子に運転の仕方を聞くんですか？前代未聞だよ！しかもさっきまで動いてたろ？いったい何をした！

「いったんもとに戻してから、サイドブレーキを解除して：ブレーキ踏みながら、ギアチェンジ？をして：アクセル踏んで運転開始？」

「はあーい！わかりましたー！」

これで成功したらどうなの？俺免許ゲットですか？

「あ！動いた！動いた！和くんすごい！さあ！これからがママの腕の見せどころよ！」

第1話：本を買いに行こう！（後書き）

最後まで読んで下さってありがとうございます！

面白かった！楽しかった！って、思っていただけた…かなあ……思
って下さった方は、是非！感想など、下さると嬉しいです。
なんか図々しくてすみません…

第2話：ママさんドライブ

ブオオオオン！キキイ！キュッキュツ！

なんかめっちゃ速いんですけど！恐ろしいくらいスピードでてるんですけど！

「さあ！和くん！ママさんドライブの開始よー！！」

ブオオオン！！

「か、母さん？今なんキロでてんの？すごい速いよね？なんかすごい速いよね？」

「うーん：60ってことにしておいてね！ここの制限速度60だから！」

しておいてって：あ！信号無視した：ああ：前の車抜いちゃった：ここ追い越し禁止なのに：

「イエーイ！どけどけー！ママ様のお通りじゃあああああああ
あ！！」

キヤラおかしくなってるし：

「あ！母さんそこは右に、右に曲がってね。」

「はい右折ー！」

ガー！キキイ！

「馬鹿野郎！死にてえのか！？」

「きゃー！ー！！」

トラックの運転手が叫び：横断歩道をわたっていた人が悲鳴をあげる：

「へっへっへ！どんなもんよー！誰もママを止められはしないわー
！」

「母さん？もうそろそろ着くからスピード下げたほうが…」

「ふふふ：大丈夫よー！なにも恐れることはないわー！」

いや：恐れることはやまほどある：まず、母さんが怖い！他には迷惑をかけてしまった人達の逆襲とか：考えすぎかな…？

あ、また信号無視したし：

キツキキキイイ！シュー：

「はい！とうちゃくく！早かったでしょ？まだ10時よ！さあいつてらっしゃあゝい！」

「行ってきます…」

最後にドリフト駐車を成功させた母さんは上機嫌で帰っていった…
そして俺は東出入口へと向かった

第3話：本

「和也！」

東出入口で香織を待っていると、突然手を振りながら走ってくる少女：誰？

「ごめ〜ん！待った？」

少女は俺に話しかけてきた…可愛い！マジで可愛い！誰なんだろう？人違い？

「え？誰？」

「はあ？誰って私でしょ？香織よ？顔忘れちゃったの？ひど〜い！香織？こんなに可愛いかったっけ？」

「香織？へえ〜！変わったな！全然わかんなかった!!」

「当然よ！会っても顔とか見なかったじゃない！何年ぶり？こうして顔合わせるの？」

確かに学校行くときたまに会うけど、顔とか見てなかったな…挨拶ぐらいしかしなかったから

「ん〜：中学のときはよく会ってたから…2年ぶりか？」

「そんなところね！じゃあ本買いに行こうか！」

「ちよっと待てよ！どうして香織は俺がわかったんだ？俺はわかんなかったのに！」

「へ？…いや…和也は…全然…そう！全然変わってないから！」

「なんだよそれ！俺だって身長とか伸びたぞ！」

「もう！そんなことは気にしな〜い！いいこ！」

「ん？ああ…」

テケテケと俺の前を走る香織…子供か？といったくなるようなくらいチョコチョコと動き回る。

「なあ？どこに本買いに行くんだ？その辺でよくね？」

「もうちよっと！もうちよっと先にあるの！」

そういいながら歩く香織。しばらく歩いていると、店らしき建物が

見えてきた。あれのことか？

「あそこよ！あそこ！」

「いや…本買いに来ただけなのになんでそんなにはしゃいでんの？」

「うるさい！早く行くの！はい！走った走った！」

「おい！ちよつと…こける！手を離せ！俺がこけるって！」

いきなり手を握り走り出した香織。その行動についていけず、俺は転びそうになった…むしろ転んだ！

ズザー…

「ぷっ…何してんの？痛そ…」

「痛ッ…マジで痛い！受け身したのに頭打った…」

「…大丈夫？ごめんね？早くいこ！」

「わかった！わかったから引っ張んな！痛い！」

「は…い！」

シャ…自動ドアが開く。すると店員が笑顔でいった。

「いらっしやいませ」

その店員の笑顔を無視し、香織は俺を引っ張って店の中へ入っていく。店の中はとても広く、様々なジャンルの本が並べてあった。俺の目的は野球の本だ…香織の目的はなんの本だろう？

「なあ、香織はなんの本買いにきたん？」

「え？私？小説よ！最近恋愛小説にはまっちゃって…！」

「そ、そうか…じゃあ俺、野球の本見てくるから！」

「うん。私があとから野球の本のとこいくから！待っててね！」

「わかった。」

俺はスポーツの本が置いてある棚に向かった。

そこには野球をはじめ、ゴルフ、テニス、サッカーにバスケや卓球、ラクロスっていうのもあるな、ほかにも様々なスポーツの本があった。（ラクロスってなんだ？）俺は迷わず野球の本の場所に立った。その中でも俺の目をひいたのは、【魔球のすべて】という本だ…その本の目次には、現代の魔球ジャイロボール！や必見！すべての変化球の投げかた！とかキレのある直球を投げる！など、俺の求めて

いたものがあつた。

「うわゝ…キレイのある直球か…まさに俺が求めてるものじゃん！」
そこで俺はしばらくその本を読んだ。

第4話：本屋

「和也あゝ！」

「……」

「和也あ……」

「……」

「和也！」

「……え？何？」

「もう！呼んでも返事してくれないんだもん！」

「ああ……ごめん……読みいつてた！」

「へえ、それが野球の本？どう？ねえ、なにか参考になりそうなものかいてあった？」

「ん？ああ！かいてあった！完璧！まさにこれだよ！俺が求めていた本は！」

「そう？よかったね！」

「おう！じゃあ買ってくるわ！まっけてくれ！」

「うん。」

俺はレジに向かった。

ちょうど人が全然いないときだったらしく店員がひまそうにしている。

パタン

「あの、これください」

店員は俺が置いた本をてにとり、バーコードを読み取った。
ピッ！

「1980円です」

カサカサ：チャリンチャリン！

「はい。1980円ちょうどお預かり致します。レシートはどうされますか？」

「あ、いいです」

そしておれが商品をてにとると、店員が

「あ！ただいま「世界の本を読もう！読みまろう！」キャンペーン中ですので、1000円以上のお買い上げのお客様は、この箱のなかからクジをひいて頂きまして、当たりが出ればこちらの賞品をお持ち帰りしていただきます。どうぞおためしください。」

俺は賞品の書いてある紙を見た。

なになに：三等、かわいいクマさんのぬいぐるみ。

二等、5000円分の図書カード。

一等、豪華世界旅行小説読み回りツアーペア招待券：なんか一等だけずばぬけて豪華じゃない？気のせい？

「ねえ、和也あゝまだあ？」

俺が賞品に圧倒されていると、香織がやってきた。

「ん？ああ、なんかキャンペーン中みたいで、クジをひいて賞品をゲット！みたいなことしてるらしいんだよ」

「へえ〜！それで、当たったの？ハズレたの？」

「まだやってない」

「なんで？はやくしようよ！もしかしたら当たるかもだよ！」

「ああ、じゃあ早速」

俺は箱の中に手をつっ込んだ：そして中にあった玉を取り出した。

第5話：賞品

「え〜つと…3?」

チャリンチャリン!

「おめでとうございます!三等です!それでは、このクマさんをどうぞ〜!」

「きゃ〜!和也やったね!当たったよクマさん!」

「あ…ああ…」

全然うれしくない…なに?クマさんって!クマごときに敬語かよ!?
人間も落ちたもんだぜ!

「…なあ香織」

「ん?なに?」

「俺…これいらねえんだけど…」

「いいじゃない!かわいいんだからあ!部屋にでも飾ればあ?」
男の俺にクマさんを部屋に飾れと?論外だな。

「俺、これいらねえからお前にやる」

「えっ!?本当に?!」

「ああ…だって俺いらねえから…」

「やったー!私クマさん大好きなんだあ!和也ありがと〜!」
素直に喜ぶ香織。こうして見てると香織ってかわいいかも…

「和也どうしたの?早く帰ろうよー」

「あ…ああ。そうだな
ぐう〜…」

腹がなった…俺はケータイを見た。今は13時20分。さすがに腹
がへったな…

「「あの…」」

「和也が先にどうぞー」

「あ、ああ。飯食いに行かね?俺、腹減っちゃってよー」

「うん!いいよ!私もそう言おうとしてたんだ!」

「そうなん？で、どこに食いに行く？どっか行きたい場所あつか？」
香織は少し迷った後に言った。

「えっと…吉野屋…」

「よ…吉野屋…ですか…今、牛丼あったっけ？」

「…何よ！？あるわよ！悪い？私は豚丼が食べたくなったのよ！吉野屋は牛丼がすべてじゃないわ！何を頼んでも、安くて早くて美味しいのよ！…何よ！そのかわいそうな人を見る目は！あんただって本当は牛丼より豚丼が食べたいんでしょ？そうなんでしょ！」

熱く吉野屋について語り出す香織…俺は別に豚丼は…

「クマを握り締めて言うセリフじゃないな…まあ…いいよ、吉野屋で…」

なんで香織のテンションがおかしいのか分からないが、とりあえず同意しといた方が良さそうだ。

「…何？不満？…ねえなにが不満なの？教えてよ！吉野屋のなにが不満なのよ！…ああ！あれか！あれね！吉田屋の方がいいのね！？」

「えっ？あ、いや！俺は別にそんな…俺も豚丼が、食べたいな…って！」

やばい…裏目にでた！どうしたものか…

「ふーん…本当にそう思ってるの？」

「は、はい！そう思っています！」

「じゃあいいわ！このまま吉野屋へ行くわよ！荷物もってね！」

「はい！荷物は俺が持ちます！」

吉野屋へ向かって行く俺たち…少し歩くと、オレンジの看板が目に入っただけ…こんな近くにあったのか…

…
…
…

帰るときに香織から聞いた話によると、香織は吉野屋の隠れたファンらしい…なんだそれ？…その日疲れた俺は帰ってからすぐに寝た。

第6話：練習試合。前編（前書き）

少なからず、待って下さっていた皆さま申し訳ありませんでした！
久々の投稿です！

第6話：練習試合。前編

3月13日。それが今日の日付だ。

今日は監督の提案で、隣り町の学校、星見高校と練習試合をするの
とになっている。

星見高校は去年の夏の大会で準優勝。惜しくも甲子園には行けな
かったが、それなりに強いと言われている強豪校だ。

まあ、はつきりいって、今の俺にはそんな肩書き知ったこっちゃ
ねえ！ ようは、ボールに触れさせなけりゃいいことだ。

俺はこの1ヶ月、死に物狂いで練習した。

その成果あって、球速、コントロール、スタミナ、安定感が増し、
今まで以上に“来る”まっすぐが投げれるようになった。

“それ”をためす今日、俺は絶対に負けるわけにはいかないんだ。
そして俺は決意を固め、バスに乗った。

「よーし。着いたぞー。みんな下りろー」

バスに揺られること約30分。俺達、清流高校野球部は、『町立清
流野球場』に着いていた。

対戦相手の星見高校はまだ来てないらしく、俺達は待つ時間に、ア
ップをすませることにした。

「早川先輩っ！一緒にキャッチボールやりませんか？」

適当にグラウンドを走っていると、1年の喜名森翔太きなもり しょうたがグローブを
持ってやってきた。

どうやらもう走り終わったらしく、額に汗を浮かべている。

「わかった。じゃあ、悪いけど、俺のグローブ持って来てくれないか？ あと1周ほど走るときたいんだ」

「はいっ！ わかりました！ 急いで取ってきます！」

「ああ。わりいな」

俺に軽く一礼すると、喜名森は走ってベンチへと戻って行った。
さあて、あと1周走るか！

第6話：練習試合。前編（後書き）

今回も『野球バカ』を読んで下さってありがとうございます！

なんか時間を置きすぎたせいかな、話の内容がおかしくなってしまう
てる気がします…。

ていうか、ぜ…全然っ！ コメディーじゃない…。

ああ…どうしよう…？

とりあえず、これからまた頑張ります！ どうか、応援よろしくお
願います！

それでは、リリィでしたー

第7話：練習試合。中編

シュツ！ ……パシツ！

シュツ！ ……パシツ！

キャッチボールを始めて約5分。

結構肩が温まってきた。

そろそろキャッチボールを切り上げて、ブルペンでピッチングを
に行こうかな。

シュツ！ ……パシツ！

俺はボールを受け捕ると、そのまま喜名森に話しかけた。

「よし。喜名森、そろそろ終わっかー」

「ええ！ マジっスか？ もうちょつとやりましょうよ！ 肩温まっ
てきて、これからってとこじゃないですか。…あ！ もしかして
アレですか？ 俺が嫌いなんですか？」

…いやあ…喜名森の気持ちも分からないでもない。

たぶん俺だったら、嫌がろうがなんだろうが、無理矢理やらせると
思う。

だがしかし、喜名森の守備位置はショート。

キャッチャーじゃない喜名森には、俺の球を捕るにはちょっと危な
いだろう。

「よく聞け、喜名森。俺は別にお前が嫌いなわけじゃない。つー
か、嫌いなら最初からお前とやらねえよ」

「えっ？　じゃあなんなんスカ？」

「肩温まってきたから、ブルペン行こうかと思ってよ。ほら、お前シヨートだから、全力投球したら危ねえだろ？　やっとレギュラー入りしたんだしよ」

「あゝなんだあ。そんなこと気にしないでいいですよ！　俺、中学るときキャッチャーやってましたし。今だってシヨートやってますが、バッティングセンターとかでキャッチの練習してますから、たぶん大丈夫ですよ」

ま、マジかよコイツ…！　前キャッチャーやってやがったのかよ！
ふっ…それなら話ははええぜ！

「おっしゃ！　喜名森！　キャッチャーミット持ってこい！　ブルペン行くぞ！」

「は、はい！」

そして俺達は、急いでブルペンへと向かった。

第7話：練習試合。中編（後書き）

どうも、今回も『野球バカ』を読んで下さってありがとうございます！

なんか短いですが、もう、バシバシ書いていくんで、これからよろしくお願いします！

また次回も読んでいただけると光栄です。

それでは、リリイでしたー

第8話：練習試合。後編

「おっしゃー！ まだまだ行くぞ喜名森ー！」

「はい！ バッチこいです！ 早川先輩！」

シュツ！ シュー…パンツ！

くっはゝ気持ちいいゝ！ マジ最高だぜ！

今俺達は、ブルペンでピッチング練習をしている。

喜名森はあまりキャッチャーって体格はしてなく、身長175cmくらいで、体重は65kgと至って普通の体格だが、予想以上に投げやすく構えてくれて、確実にボールを見て捕っているため、安心して投げるができる。

なんで監督はコイツにキャッチャーやらせねえんだよ！

「ナイスボール！」

受け捕ったボールを投げ返して、喜名森が言った。
よーし！ もうちょい速く投げてみっか！

俺は、ゆっくりと左足を股関節辺りまで上げ、位置エネルギーを作り、そのまま尻から前にいく感じで体重移動をする。

体重を乗せる左足の爪先を相手の方向に向くように力強く踏み込み、グローブを抱え込むようにして体に巻き込み、自然な筋肉の動きに逆らわぬよう、力まずに思いっきり大きく腕を振る。

シュウア！ シュギユウルルルウウウ！

そして、振り切った腕に負担をかけないように、体に巻き付ける感じで、体重移動をした足側に腕を持っていく。

ズバーン！！！！！！

「…は…はええ…ちよつと半端じゃねえぞこのスピード…」

ど真ん中に突っ込んでいったボールは、決るように喜名森のミットに吸い込まれていく。

くっはー！ 気持ちいいー！ やべえなこりゃ！ これだから野球はやめらんねえぜ！

「は、早川先輩！ すげえーッス！ 俺、人がこんな速い球投げるの初めて見ましたー！！ やべえー絶対甲子園行けますよー！」

「はっはっは！ そうかあ！ だけど、もうちょい速く投げれるぜ？」

「マジっすか！？ じゃあ、あと変化球とかあったら無敵ですね！」

「いや、まだ変化球はいいよ。俺、まだまだ速くなると思うんだ。でも、変化球に頼ってたら速くなるもんも速くならないだろ？ だから、せめて覚え始めるとしても、5月からかな」

「そうッスね！ その時は俺も協力しますよ！」

「ああ！ 頼むぜ！」

「おい。和也、喜名森君！ 集合だって監督が呼んでるよ！」

ブルペンの入り口からヒョコつと顔を出して、俺達を呼んでいる女の子。

上から下までジャージ姿という、まさにマネージャーな女の子。：

……香織。

なんで香織がマネージャーかと言うと、

「私、甲子園行きたい！」

といきなり言い出して、マネージャーになってしまったわけだ。

「ああ。わかった！ いまから行くよ！」

俺は軽く返事をして、ブルペンを後にした。

第8話：練習試合。後編（後書き）

どうも、リリースです！

今回も『野球バカ』を読んで下さってありがとうございます！

次回は、『対戦！星見高校！』です！

それでは、次回もまた読んでいただけると光栄です。

リリースでしたー

第9話：対戦！星見高校！。前編

「おねがいしゃあつす！」

俺達がベンチへ戻ると、すでに星見高校はアップをすませたようで、練習試合の挨拶をしていた。
やべえ！ もう試合始まるじゃねえか！

「お、遅れてすみません！」

「おっやつと来たかお前ら。もう挨拶終わったから、早く準備しろよ！　うちは先攻だ」

「おっす！」

俺は急いで…つつても、そんなに準備することは無く、簡単に説明すると、バット持って、ヘルメットかぶるだけなんだけどな。

「おい早川」

「ああ？　どうした守永」

俺がベンチに座ると、隣りに座っていた、俺と同じく2年の守永啓もりなが け
一郎いっちゃんが話しかけてきた。ちなみに守備位置はサードだ。

「これに、今日のスタメンと打順が書いてある。いちよう見とけ」

サッと、俺に渡してくる守永。

「ああ。わりいな」

俺は紙に目をやった。

- 1 早川 和也 4番
- 2 東 路央 6番
- 3 花道 秀作 2番
- 4 東堂院 流 7番
- 5 喜名森 翔太 5番
- 6 守永 啓一郎 3番
- 7 矢澤 賢太 8番
- 8 城ヶ崎 太一 1番
- 9 雨水 亜麻利 9番

キャッチャーは東か！ こりゃ絶対打たれねえな！
打順も悪くないし、今日は俺達の勝ちだろ！

「なにニヤニヤしてるんだい？」

「おっ東か！ 今日は頼むぜ！」

「任せてよ！ 僕は和也君とバッテリーが組めて最高なんだからさ
！ もちろん今日は完全試合狙いだよ！」

「ああ！ 任せとけ！」

グラウンドに目をやると、1アウト1塁で、守永が左バッターボックス

クスに立っていた。

守永が真剣なまなざしで、相手ピッチャーを見ている。

うわぁ…ぜってーこえー

これぞまさに威圧感だな。

そして、相手ピッチャーはキャッチャーのサインを見て、ゆっくりと頷き、大きく振りかぶって…投げた！

ピッチャーから放たれたボールは110くらいであろうスピードで、キャッチャーへと向かっていく…。

ククッ

カキーン！！

待ってましたと言わんばかりに、バットを振る守永。

バットに当たったボールは、綺麗な放物線を描いてライトスタンドへと吸い込まれていく。

初球からカーブがくることを知っていたかのように、ガッツポーズを決め、塁を回る。

ツーランホームラン！

初回から2点先制を決め、次の4番である俺に回ってくる。

「ははは！ バカ野郎ー初回からホームランなんか打ちやがって！俺が打てなかったら恥ずかしいじゃねえか！」

「へっ…打てよ」

「あたりめえだろ」

そして俺はバターボックスに入った。

第9話：対戦！星見高校！。前編（後書き）

どうも、リリィです！

始まりました！ 星見高校戦！

とりあえず、今回も前編、中編、後編ってことで進めていこうと思います。

それでは、今回も読んで下さってどうもありがとうございました！
また次回も是非！

リリィでしたー

第10話：対戦！星見高校！。中編

シュウア！ シュギュルルルル！
ズバーン！

「ストラックバッターアウト！ チェンジ！」

「おっしやあ！」

3回裏、星見高校の攻撃が終わり、4回に突入した時点で、3対0。
1回表で俺はツーベースを打ち、喜名森のヒットで3点目をいれたわけだ。

ちなみに、俺は星見高校に対し、ヒット0。6奪三振を奪い、完全試合に向けて、好スタートをきっている。

『4番、ピッチャー。早川君』

俺はバットを持ち、バッターボックスに立った。

相手ピッチャーは、大きく息を吐くと、力強く振りかぶり、大きく腕を振り下ろした。

シュツ！ シュルルルル！
ブン！

「ストライーク！」

は、速い！ なんだ？ 1回の時とは比べ物にならないくらい速い！

そして、2球目も同じように投げる。

ブン！

「ストライーク！」

当たらない：そんなバカな！？ 速さはストレートなんだぞ？ 変化しているはずがない。 変

そして俺は、相手ピッチャーの投球を見た。

ワインドアップで大きく振りかぶり、体重移動をしながら、腕を大きく振り下ろす。

シュツ！ シュルルルル！

ピッチャーから放たれたボールは、勢いよくキャッチャーミットへと向かってくる。

パン！

「ストラックバッターアウト！」

なんだ：変化したのか？ ただのストレートじゃないのか？ 分からない：。

なんなんだあの球は：。

「おい早川！ どうしたんだよ？ お前がバットに当てれないなんて」

「分からねえ。分からねえんだ：。ストレートのはずなのに、当た

らない…」

「……おそらくあれは、ムービングファーストボールだな」

ムービングファーストボール…？

「か、監督！ なんスか？ その、ムービングファーストボールって」

「ストレートだ。…だが、フォークほどではないが、落ちるんだよ。そのせいでバットに当たらなかったり、内野ゴロになったりするんだ。まさか星見にこんなピッチャーがいるとは…」

ムービングファースト……これを上手く打てるようになるには、試合中じゃあ時間が足りないな…初回に先制点入れといてよかったぜ。

「ストラックアウト！ チェンジ！」

よし！ なんとかしても守りきってやるぜ！

第11話..対戦!星見高校!。後編

カキーン!

パシッ!

「アウト! チェンジ!」

笑えねえ…笑えねえよマジで…

今は9回裏。俺達の最後の攻撃は無得点に終わり、いまだ3対0のまま、最終回になっている。

「…頼むぞ早川」

「はい!」

俺はグローブを持ってマウンドへ向かった。

ちくしょう…練習試合だったのになんてプレッシャーだ…。

俺がマウンドに立つと、東が座り、サインを出してくる。

“まっすぐをインハイに”

俺はゆっくりと頷き、ボールを握る。

…打てるもんなら打ってみろ!

振りかぶった腕を全力で振り下ろす。

シュウア! シュギュルルルル!

ズバーン！

「ストライーク！」

“次はアウトロー”

「ストライーク！」

“決めはど真ん中だ”

「ストラックバッターアウト！」

「うっし！」

来てる！ 今日のまっすぐは誰にも打たれる気がしねえ！

シュウア！ シュギュルルルルル！

「ストライーク！」

「ストライクツー」

「ストラックバッターアウト！」

よし！ 三振20個目！

残るはあとひとり！ こいつを三振したら、この試合、俺達の勝ちだ！

もう、コントロールなんて気にする必要ねえ！ 全部全力でど真ん中にぶち込んでやる！

俺はボールを握り、ウィンドアップで大きく振りかぶる。

「食らえ！　これが俺の全力だ！」

シュウオ！　ギュルルルル！！！！

パアアアアン！！

「す、ストライーク！」

3対0。ノーヒットノーランで、俺達は去年の準優勝校に勝利した。

第11話：対戦！星見高校！。後編（後書き）

え〜っと…いちおう星見高校戦はこれでお終いです。

勢いで全部書いちゃったので、なんか文章がめちゃくちゃです…。はい。気になると思いますが、どうか気にしないで下さい…。

今回も読んで下さってありがとうございました！

第12話..ムービングファーストを潰しちゃう！

「えゝゝただいまより、星見のピッチャーが放ってきやがった、“ムービングファーストボール”をどうやってゝはい。ぶっ潰すかを考えたいと思います」

えゝゝ今日の部活は、先ほどキャプテンの東堂院流とうどういんながれが言ったように、前回の試合で星見のピッチャーが放ってきやがった“ムービングファーストボールをどうやってぶっ潰すか”である。

まあ、俗に言うミューティングだ。

確かにあのボールは早い内に潰さなければならぬ（いや、別に怪我をさせるわけじゃない。2ゝ3回くらいまでにボコすかに打ち潰すってことだ）。

「はいはい！」

「はい！ 亜麻利！」

意外にも、最初に手を上げたのは1年の雨水亜麻利うすいあまりだった。いったいゝいったいどんな策があるんだ亜麻利！

「裏で回す」

回すってゝ何を？ いったい何を！ 何を“回す”んですか！ 亜麻利さん！

「おー！ いいねー！ いいよー！ “裏で回す”つとゝ」

どこからかノートとペンを取り出し、メモをし始めた流。

いや、これ、メモするようなこと言っ
てねえだろ！

「よしよし。じゃあ次は…」

「はい！」

「よしきた！　じゃあ元気いっ
ぱいの城ヶ崎！」

次に手を上げたのは、2年の城ヶ崎太一じょうがさき たいちだつた。
頼む城ヶ崎！　お前ならできる！

「“とりあえず諦める”」

城ヶ崎いいい！！

「そうそう、何事も引きが肝心！　“諦める”　つと…」

そして、ひたすらメモる流。
つてうおい！　これこそメモる意味ねえだろ！？

「じゃあ次は…矢澤いってみよー」

次は1年の矢澤賢太やざわ けんたか…。

どうせコイツもろくな事は言わねえ
だろうけど…。

「はい！　えー…自分は…“本能で
ボールに食らいつく”といいと
思いまっす！」

ほ…“本能”…いいじゃねえか。

“本能”くう…いいね！

「きたー！　きたよコレ！　本能か…いい響きだぜこの野郎！」

キンコンカンコンコン！

「あつ5時のチャイムだ！　よし！　じゃあ、対策は、“ムービン
グファーストは本能で打て！”で、決定でいいかー？」

「おー！」

「じゃ、これにて解散！」

結局、何の対策もできぬまま、今日の部活は終わった。

エピソード（プロログ？）

「で、結局どうなんだよ」

夕暮れに染まる帰り道。

俺と一緒に帰っていた、花道かどう しゅうさく秀作は言った。ちなみに花道は俺と同じ2年生だ。

「なにが」

「香織ちゃんだよ。たぶん…つか、絶対お前のこと好きだぜ。オレが保証するよ」

お前に保証してもらう必要はねえ！

俺はそう思いながらも、花道の話に耳を傾ける。

「だってあれだぜ？ フツー2年後半になってからわざわざマネージャーになるか？」

人の勝手だろ

「しかもここんどこ毎日一緒に学校来てるじゃないか」

家が前なんだし、しかたねえだろ

「いやあゝ羨ましいぜゝ俺も彼女欲しいゝ」

あゝ…うぜえ

「今の『野球バカ』ってことか…」

「そういうこと。でも、今更ながら、野球はコメディーにしちゃダメ！　っていう作者の野球ファン魂に火が付いちゃったわけよ…」

「で、どうなるんだ？　俺達…」

「大丈夫！　作者は俺達を捨てはしないさ！　頑張って考えたキャラクターだぜ？　ようは子供のようなもの。不幸中の幸いか、作者が書いている作品のほとんどにこの“清流町”が出てくるんだ！」

「…と、言いますと？」

「乱入しちゃったりできるんだよ♪」

「…それは凄いな…」

「だろ？　だから、野球バカはお終い。野球は書くんじゃない、見たりやったりしたほうが楽しいんだよ。それに…」

「それに？」

「今の作者の文章力じゃあ、野球の小説を書くのは無理だし」

「言われてみればそうだな。今のレベルの作者には無理だ」

「だろ？　つーことで、野球バカはお終い！　また別のお話で会えるといいな」

「そうだな…じゃ、さようならー！」

エピローグ（プロローグ？）（後書き）

野球に関するメッセージが届きました。

記号が多くて読めなかったんですが…。

たぶん後書きの事だと思いますので、謝りの言葉を書きたいと思います。

あれは私の思いでして、野球には関係ありません。
すいませんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5194a/>

野球バカ

2010年10月12日03時47分発行